

富山県教育委員会教育長殿

富山県立富山視覚総合支援学校
校長 佐伯英子

令和4年度学校総合評価を別紙(様式5)とともに提出します。

令和4年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

(1) 卒業後を見据えた社会体験活動の実施

視覚障害生徒と病弱生徒はともに、その障害特性から人間関係の形成やコミュニケーションなどの社会性が育まれにくいと、そのような面への支援が必要である。しかし、特別支援学校において支援されて過ごすことが卒業後の生活とのギャップにつながり、学業や仕事が続けられなくなったケースがあったことから、卒業後の社会生活への橋渡しとなるよう中学部・高等部普通科生に対し校外での啓発活動や校内就業体験、外国籍の大学生との異文化交流等の社会体験活動に取り組んだ。

その結果、外部の人に質問や依頼をしたり、困ったときには生徒相互に協力して解決したりする等、生徒の変容がみられた。

(2) 高等部卒業学年在籍生徒に対する進路支援

本校の高等部には普通科と保健医療科、専攻科医療科がある。全校で幼児児童生徒在籍者数20名の内、今年度の高等部卒業生は7名である。生徒の障害の程度や年齢、居住する地域等がそれぞれに違うため、本校では一様に進路指導を進めることが難しく、これまで在学中に進路先が決定しないケースもみられている。そこで、進路指導マニュアルを見直ししながら、希望調査や面談を実施したり、教員や保護者対象の進路に関する学習会を実施したりする等、丁寧な進路指導を進めることで、卒業生の進路希望達成率80%以上を目指した。

その結果、高等部卒業生は概ね、進路希望先への就職等の内定が受けられる見通しとなった。

(3) 年齢に応じた寄宿舎の生活指導の在り方について

現在、寄宿舎には中学部生から理療科生までの幅広い年齢層の生徒が利用している。特に今年度は理療科生の割合が多くなり、年齢層に合った生活指導の見直しの必要性が高まった。そのため、これまで取り組んできた「季節にちなんだ活動」の他に、政府からのお知らせを音声でまとめたものやNHK番組等の音声を月1回以上舎内放送で流したり、寄宿舎生でミーティングを行う際に日常生活を助ける「便利グッズ」や毎日新聞社発行の「点字毎日」の記事の紹介を学期に2回以上行ったりした。

その結果、社会生活に必要な情報や生活を助ける情報の提供により、寄宿舎での余暇の充実や生活のしやすさにつながった。

7 次年度へ向けての課題と方策

- ・コミュニケーション能力や社会性の育成は、中学部・高等部普通科生に限らず、また視覚障害や病弱の障害種に関わらず、全校幼児児童生徒において課題となっている。コロナ禍により、校外学習や地域交流等の校外に出る機会が限られてきたが、社会体験活動をどの学部においても発達段階に応じて適切に設定していく必要がある。
- ・複数の障害種を教育の対象とし、全県下を校区とする本校においては、進路指導が困難な面が多くある。特に、視覚障害生徒については合理的配慮の提供が難しいことを理由に進学先や就労先を見つけること自体が困難である。病弱生徒の進路先についてはこれまでの進学・就労先のデータの蓄積、視覚障害生徒の進路先については視覚障害に関する理解啓発を今一層行うことで新たな進学先・就労先の開拓につながるようにすることが必要である。
- ・在籍数の減少に伴い、次年度は寄宿舎生が減少する予定である。年齢層も小学部生から理療科生まで幅広い。今後も、季節行事を中心とした取組以外に寄宿舎生一人一人のニーズに応じた生活指導の充実を図っていく必要がある。